

## 【問題】(演習)

出典：酒井直樹『死産される日本語・日本人』／ オリジナル問題

## 文章略解

言語を有機的な統一体とみなす考え方は国民語の普及とともに一般化しているが、これが国民共同体という観念と相俟って、国民語や国民文化そして社会を「国民国家」と重ね合わせて認識し、現在のみならず歴史的過程にまでその認識を投影する発想から脱却することを難しくしている。しかしここには、「国民」という種の同一化の様式が近代特有のものであり、それを前提とした他文化と自文化との対照とそれによる自己措定も近代独自のものであるという自覚が欠けている。

## 解答

- (一) 国民共同体の成員同士の、同じ国民共同体に属する同質の存在であるという意識の前提となる、常用言語の統一性。
- (二) 国民語も国民文化も、統一的な国民共同体を想定するのに相応して、確たる根拠もなく有機的な統一体として認識されるということ。
- (三) 現実の状態を必ずしも反映しない観念が、現実をとらえようとする際の発想を方向づけているから。
- (四) 近代において、国民共同体は他と区別された均質な統一体として措定され、それが自明の前提となっているから。

(五) 自己充足的な統一体としての日本語を實體視することが、他と区別された均質な国民共同体としての日本という近代特有の概念が超歴史的に存在していたかのような意識の醸成と、それを前提化した近代人の発想の形成に大きな役割を果たしたということ。〔115字〕

(六) a Ⅱ普及

b Ⅱ実践

c Ⅱ帰納

d Ⅱ表象

e Ⅱ帰属

出典：『堤中納言物語』「はいずみ」／ オリジナル問題

現代語訳

この女は、まだ夜中にならない前に(新しい住まいに)到着した。見ると、たいそう小さい家である。(女を送ってついできた)この召使いの少年は、「どうしてこんな(みすほらしい)所においでになろうとあそばすのですか」と言って、(女のこと)がたいそう気の毒だと思つて(男の屋敷に帰りづらく)ぐずぐずしている。女は、「早く馬を連れて(あの方のもとへ)戻つておしまい。待つていらつしやるでしょう」と言つと、「奥さまのことを」『どこへお泊りあそばしたのか』などと(御主人が)仰せになりましたら、(私は)どう申し上げればよいのでしょうか」と(召使いが)言つので、(女は)泣きながら、「このように申し上げなさい」と(言つ)て、

いづこにか……どんな所に送つていったのか、とあの方がお尋ねになったら、自分の本心からではない(辛さの涙が川にまでなるほどに溢れてできたその)涙の川まで(行つて、涙に溺れていると答えてください)

と言つのを聞いて、召使いも泣くほどの気分で馬に乗つて、間もなく(男の家に)帰り着いた。

(召使いが男の屋敷に向かうころ、召使いの帰りを待ちわびてうとうとしていた)男が、ふと目を覚まして見ると、月もだんだん山の稜線近くになつて(そろそろ沈みかけているほどかなり時間が経過して)いる。「(召使いは)不思議なくらいなかなか帰つてこないものだなあ。(妻は、近所と言つていたが)遠い所へ行つたにちがいない」と思つにつけても、たいそう胸がしめつけられるので、(男は)

住みなれし……住み馴れた家を振り捨てて遠くへ行つた月の姿(が恋しいの)にかこつけて(妻のことを)恋しく思う気持ちを歌に詠むことだ

と詠んでいる(ちよつどそのところ)に、召使いが帰つて来た。

「たいそう不可解だ。どうして(こんなに)遅く帰つてきたのだ。(妻を送つていった先は)どこにあつた家なのか」と(男が)尋ねると、(召使いは女が詠んだ)さきほどの歌を告げ(、また女の家の様子を伝え)るので、男もたいそうせつなくて、つい泣けてきてしまう。「(妻が出て行くとき)この家で泣かなかつたのは、平氣を装つていたのだなあ」と(男は女のこと)がしみじみ不憫でしか

たがないので、「(自分が今すぐ出かけて) 行って、ぜひ(女を) 迎え(て連れ) 戻してしまおう」と思って、召使いに言うことには、「そんなにまでひどい所へ行っているだろうとは、思いもしなかったよ。まったく、そんな所では(妻は) きつと健康も害してしまうだろう。やはり、ぜひ連れ戻してしまおうと思うのだが……」と(男が) 言うと、(召使いが) 「(奥さまは家を出ていらつしやる) 道中、ずつと少しの絶え間もなく泣き続けておいであそばしました」と(言って)、「もったいない(奥さまの御立派でお美しい) 御様子ですのに」と言うので、男は「(夜が) 明けない前に(連れ戻すぞ)」と(言っ) て、この召使いを供として、たいそう早く(女のいる家に) 行き着いた。

なるほどたいそう小さく荒れ果てている家である。(男は) 見るやいなや悲しみがこみ上げてきて、(戸を) 叩くと、この女は(この家に) 到着したときから、(道中泣き続けて来たのに) さらにまた泣き臥していたときで、(女が自分の身の回りの世話をさせる侍女に) 「誰ですか」と尋ねさせると、この男の声で、

涙川……(あなたが溺れているという) 涙川がどこにあるとも知らないで、渡りづらい急流を行きつ戻りつしながら、泣く泣くさ

まよって(やっとここまで) たどりつきました。(。迎えに来ましたからいっしょに帰りましょう)

と詠んだのを、女は、たいそう意外なほど(あの人と) 似ている声だなあ、とまで(思うほどに)、驚いたことだと感じている。

### 解答

(一) ウ|| 不思議なほどなかなか召使いは帰ってこないものだなあ

オ|| 妻は平気を装っていたのだなあ

カ|| 妻はきつと健康を害してしまうだろう

(二) 自分の新しい住居のことで夫に心配をかけまいとする気遣い。

(三) 夫の意向を汲んで、新しい妻が来る前に家を出たが、本心ではなかったたので実は夫と別れるのが悲しく、涙にくれているということ。

(四) 召使いが、女から託された歌を男にそのまま伝えたということ。

(五) 涙川で悲しみにくれているというあなたの許に、道に迷いながらも私が迎えに来ました。

出典：中山元『フーコー入門』（ちくま新書・一九九六年）／ オリジナル問題

文章略解

フーコーは『狂気の歴史』で、精神医学や心理学が成立したのは人間の狂気が「精神の病」として認識されたことによると解き明かした。これは、科学の誕生によって狂気の解明が可能になったとする従来の定説を覆すものであった。そしてフーコーは、人間科学とは、人間を対象とする以上は科学性に到達することはできず、言語を媒介とする以上は自己を見いだすことはできないという認識に至り、人間科学の科学性の追求を放棄するのである。

解答

- (一) 狂気が医学的な疾患のひとつと認められたこと。
- (二) 人間を対象とする学問は、その対象が主体と不可分であるため、科学の前提となる客観性が確保できないから。
- (三) 人間の営みが、その人個人の中だけで完結して行われず、常に他者を媒介とせざるを得ない性質を持つこと。
- (四) 人間の心身のある状態を医師たちが病として認識の対象にすることによって、医学が成立・進化していくこと。
- (五) 人間の狂気が増したのは、それが精神疾患として捉えられるようになったことによるものであり、その精神状態自体は以前から存在していた。その歴史的経緯を明らかにすることで、狂気であることを過度に意識する近代人の精神を解放していこうとすること。

〔117字〕

- (六) a 〓 統御      b 〓 治癒      c 〓 投影      d 〓 訣別 (決別)      e 〓 遂行

解説

(一) 傍線部に続く文の中で「狂気は……心理学の成立の条件そのものであり」(19行目)と述べられており、この傍線部にいう「条件」とは「狂気」が成立することだとわかる。

その「狂気」については、傍線部分直前に「このように狂気の歴史を……」とあり、その指示内容をまとめていくことから解答が作成できよう。ここでは、フーコーが明らかにしたこととして、「精神医学が科学となったから狂気が疾患として認識されたのではなく、狂気が『精神の病』として位置づけられたからこそ、精神医学と心理学が可能になった」(10～11行目)と説明されている。この部分のニュアンスをくんで、「狂気が精神病として認知されたこと」という筋で説明がかかれていればよい。

(二) 理由説明を求めてくるタイプの問いにも何種類があるが、ここでは論理的な中間項を指摘する作業、つまりは「学問の対象が同時にその主体でもある」ことと、「厳密な科学性に到達することができない」こととの間を論理的に補っていくことが作業課題である(この設問のように、論理的な手続きがきちんとした部分に傍線が付されている場合の理由説明問題はこのパターンが多い)。

ここでは筆者(中山)の言う「科学性」なるものの内容を検討していくことから解答の手がかりがえられよう。筆者の念頭にある「科学」とは、傍線部分の直前にある「自然の事物を対象とする物理学や化学のような学問」(24行目)であり、換言すればその学問の対象が主体である人間と重ならない(明確に区分できる)ものである。これに対して、傍線部分にあるように、人間諸科学の場合「対象」〓「主体」であって、両者が一緒になっている。したがって、その対象を客観視することができないわけだ。だから「厳密な科学性」に至れないのである。こうしたポイントの説明があればOK。

(三) 設問の要求は、傍線部分に言う「分裂的」(あるいは、その前に登場する「分裂病的」というタームの意味するところの説明である。この傍線部分が「このように」という指示語を含んでいることに注目し、その指示内容を追っていくようにすればよい。ここでいう「分裂病的」については、「西洋の近代の資本主義社会は、経済的および社会的な条件において、人間に分裂を強いている」(31～32行目)以下に述べられている。つまり、社会的な関係の中において人間は「自己」だけの生を完結させることができず、あらゆる

る場面において他者を媒介とすることによってそれぞれの生を成立させているようなシステムの中に組み込まれていることの指摘がここでなされているわけだ。ここを読み落として、単に精神病質としての「分裂症」に関連づけて解答を書いていってみても、空振りになってしまう。

こうした性質を、傍線部分に言う「文化」に関連づけて述べていくことで、解答は得られよう。筆者(中山)が挙げている例は「言語」(32行目)・「労働」(33行目)・「生産」―「消費」(34行目)などであるから、知的な面に限らず、広く「人間の営み」一般を指すもの、と捉えておいた方がよい。

(四) 傍線部分に言う「同じような問題」とは、この段落の中にある「人間科学という学問の誕生の条件」(42行目)の内容が、直後の「医学の誕生」(43行目)に共通する……というほどの含意である。その点をまずは踏まえて、両者に共通することからは何なのかを考えていこう。

「人間科学という学問の誕生の条件」とは、前段落にある「こうした人間科学の誕生の秘密」(38行目)という表現にほぼ符合している。この「誕生の秘密」とは、(一)で検討したように、心理学で言うなら「狂気」が認識の対象になったがゆえに心理学が誕生したということ、つまりは人間の認識の変化によって学問のあり方が変わってくるということである。このことを、「医学」の事情に即して述べればよい。要は「人間のある状態を『病』として捉えるようになる」↓「医学が成立・拡大する」ということだ。この点が指摘できていればOK。

(五) 傍線部分直前の「こうした人間科学の誕生の秘密を暴きだす」ということについては、前問で検討したとおり、人間のある精神状態を「狂気」として捉えるようになったから心理学・精神医学が成立した、という事情を明示することを指す。このこととの関連で、傍線部分に言う「内的な抑圧の機能を解除」することを吟味していけばいい。

傍線部分の「その」の指示内容は直前の「人間科学」、具体的にはこの段落の冒頭にある「心理学」を指している。これが人々の内面を抑圧している状況を、前述の「秘密を暴く」ことによって打開する……というのが傍線部分の趣旨である。では、「狂気」が認識対象になったこと↓心理学・人間科学が誕生した(つまりは「狂気」とされるような心的状態は心理学・人間科学の誕生以前からあったということ)を明らかにすること(a)でどのように「抑圧から解除」されるのか。これに関しては「狂気」として捉えら



れている人間のことを考えてみればよい。「狂気」というのはこの近代社会に特有の精神状態ではなく、要するに心理学が進んできてもよく認識対象になっただけなのだ……と考えれば、「狂気」に囚われている人の精神も少しは楽になるのではないかと  
いうこと(β)だ。こうしたニュアンスをまとめて解答を書けばよい。おおむね $a \rightarrow \beta$ の筋で書かれていればよい。

## 現代語訳

西行法師が出家したときに、(残された家族などの)後(の事)を弟であった男に託しておいたが、幼い女兒で格別に可愛いがっていた(娘)を、そうは言ってもやはり見捨てにくく、どのようにしようかと思っただけでも、後の心配がなく安心であるはずの人も記憶になかったので、「特に娘を安心して託せる後見人も思いつかなかったのだ」、やはりこの弟である(この家の)主の(養)子にして(我が子同様に)可愛がってくれるようにと、強く念を押して言い残したのだった。

こうして、あちらこちら(の諸国)を修行して歩きまわろうちに、あつという間に二、三年(の月日)が過ぎてしまった。何かの機会があつて、京の方へめぐり(歩いて)きた折に、かつての(家督を譲った)この弟の家(の近く)を通り過ぎたところ、ふと(娘のことを)思い出して、そういえば、昔(別れたあ)の娘もきつと五歳ほどにはなっていることだろう、どんなに(美しく立派に)成長しているのだろうか、(娘のことが)気がかりに感じられて、このとおり(自分が実の父親)だと名乗りはしないまでも(一目娘を見てみたいと思つて)、門の蔭から(中を)じつと覗き込んだちようどそのとき、当の娘が、たいそう粗末なひとえものの着物姿で、下々の召使などの子供たちに囲まれて、(一緒に)土の上に直座りをして、立部の間近で遊んでいる。髪はふさふさと肩のあたりに纏わつて(美しく)、顔付きもすばらしく、(さぞかし美しい女性になりそうだと将来が)楽しみに思われる素質を持つ(娘)を、ああ、これ(が我が子)なのだなあと思つて見ると、胸が痛いほどに感慨が押し寄せ、(それにつけても、この娘の扱いは何だ、言い残した約束と違ふではないかと思うと、現実の娘の姿に不満を感じて)情けなく思つて、(その娘を)見つめながら立っていると、その子が自分の方を見やつて、「さあ(あつちへ行きましょう)。(あそこに)お坊さまがいるのが、怖いから」と言つて、(屋敷の)奥のほうへ入つてしまつた。

## 解答

(一) ア 西行が格別にかわいがつていた娘

イ 安心して娘の養育を任せられるような後見人  
ウ 何かの所用があつて

エ Ⅱわが娘が器量もよく、将来が楽しみな様子であることを

(二) 愛娘の美しく育つた様子に感慨を覚えたが、弟が自分の望んだ形で彼女を扱っていないので、不満を感じた。

(三) 不審な僧が見ているので、娘が周囲の召使の子どもたちに「行きましょう。坊さまがいて、怖いから」と言った。

## 解説

(一) ア 傍線部を品詞分解すると、「ことに(副詞) + かなしうし(動詞) + ける(助動詞)」となる。副詞「ことに」は漢字で「殊に」と表記できる語で、これは現代語でもほぼ同様の意味で使っているが、そのことがわかっていることを明確に答案に示すために、「格別に・とくに」などと言い換えておくべきだろう。サ変動詞「かなしうす」は形容詞「かなし」と派生関係にある語。この「かなし」は古今異義語として要注意である。現代語ではもっぱら「悲しい・哀しい」などが当てられているが、古文では「愛し」とも書かれ、さらにさかのぼるとそもそもは「様々な感情が胸に去来して一言では言い表しにくい複雑な気持ち」の意であったという。平安時代になると、「対象に対して深く思いを寄せ、大切にしたいくなる感情」を言うことが多かつた。「悲」の字も、「慈悲」などと使われていることに注意。)さらにこれが「連用形ウ音便+『す』」の形で一語化したのが「かなしうす」である。一般には「大切にかわいがる」程度の意となる。《伝承過去》の助動詞「けり」については、ここで連体形になっている理由に注意。直後の助詞「を」は《間投助詞》↓《格助詞》↓《接続助詞》の順に発達し、連体形接続の場合は格助詞と接続助詞との見極めが必要になる。ここでは、傍線部の直前の格助詞「の」が《同格》の用法となっており、「ける」は下にあるべき体言(ここでは「女子」が省略された《準体言》の用法と見ることができる。したがって、訳文の最後に「女子」にあたる現代語(この文脈では「娘」)を補って完答となる。(したがってまた、さきほど見た「を」は格助詞となる。これは傍線部外なので訳文には書いてはならないが、傍線部の解釈のためには確認が必要だということを強調したまで)。

イ 傍線部を品詞分解すると、「うしろやすかる(形容詞) + べき(助動詞) + 人(名詞)」となる。形容詞「うしろやすし」は漢

字で「後安し」と表記できる語で、対義語に「うしろめたし」（この語源は各自古語辞典で確認のこと）があり、組にして憶えておくといろいろな場面で考えやすい。この語の「うしろ」は空間的なことから抽象化されて、時間的にも「あとのこと」を意味するようになっていいる。主人公・西行法師は、この場面でまさに出家しようとしているのだから、ここでは「出家後のことが安心だ」の方向で考え、その「安心」（といってもここでは傍線部の後で否定されるから実質的には「心配」）の具体的な内容である「幼い娘の将来」を訳文に組み込む必要がある。助動詞「べし」の根本義は《当然》。これは副詞「むべし・形容詞「むべし」・形容動詞「むべなり」・動詞「むべなふ」などと派生関係にある語で、「む」の《推量》などとは成り立ちがまったく異なる。安易に《推量》などと考えると、大学入試では痛い目にあう語である。ここでは、次の「人」の解釈とセットで考えるとわかりやすい。その「人」だが、「娘の『うしろめた』い将来を『うしろやす』くしてくれる『べき』人」だから、「後見人」程度でよいだろう。そこで、「うしろやすし」と「ひ」とをつなぐ「べし」の用法としては、《当然》の原義から考えて、「いかにもそうしてくれるはずの」・「そうしてくれそうな」といったニュアンスが表現されればよいことになる。また、「べし」が後続文脈で否定される場合、多くは《不可能》の意味合いが籠もりやすく、ここでも「任せるはずの」とするより「任せられるはずの」としたほうがわかりやすい。なお、「べし」の現代語形に「べきだ」があるが、これ自体が多義語なので、入試の答案に書いてしまうと、「解釈放棄」ととられて減点されることが多い。文脈に合わせて毎回必ずその場に適切な語に言い換えること。

ウ 傍線部を品詞分解すると「こと（名詞）＋の（助詞）＋たより（名詞）＋あり（動詞）＋て（助詞）」となる。「こと」はここでは具体的な内容をほかして言う臚化表現で、現代語の「なにか・なんでも・なんとなく」のニュアンスに近い。「たより」は慣れないと「手紙」などとやってしまいそうだが、手紙は古文では「ふみ」。「たより」は、「方法・手段・つて・知り合い」などの「関連事一般」を広く意味する。ここでは、登場人物が出家して諸国を流浪する雲水生活にあることと、上にある漠然とした「こと」との関連とを考えて、「用事・ついで」などの意となる。このように、一語一語の意味を表面的に暗記しているだけでは対処できない、状況に応じた複合的な解釈を要求することが多いのも、東大の傾向のひとつといえよう。

エ 傍線部を品詞分解すると「かたち（名詞）＋も（助詞）＋すぐれ（動詞）＋たのもしき（形容詞）＋様（名詞）＋なる（助動詞）＋を（助詞）」となる。名詞「かたち」は古文では往々にして「容貌・容姿」のどちらかをいう。ここでは、すでに傍線部以前に「髪」すなわち容姿に関することは述べられているので、「容貌」の意で取るのが妥当。形容詞「たのもし」は動詞「たのむ」と派生関係にある語で、「期待できる・あとのことを楽しみである・あてにできる」といった原義を持ち、現代語よりも意味が広い。

ここでは幼い娘の容貌容姿に接しての感慨だから、「将来の成長後の美しさが期待できる」といった意味になる。これを答案に明示すること。助動詞「なり」は体言接続で《断定》の意。助詞「を」は連体形に下接しているのでアの解説に見たとおり要注意。《格助詞》なら現代語とほぼ同様の用法だが、《接続助詞》なら《条件接続》・《単純接続》のいずれにも使われる。ここでは直後に「それよと見るに、きと胸つぶれて」とあるので、このこととの関係を考える。「見るに」の「に」も「を」と同様に格助詞にも接続助詞にも使われるのだが、ここでは「く」と見ると、ハツとして」と接続助詞で取るのが妥当。とすれば、「く様なるを」を「く様子だから」などと接続関係に取るよりは、「く様子である（ところ）を見ると」と、「見る」の客語（＝直接目的語）と見た方がつながりやすい。さらに、上に見たことによつて助動詞連体形「なる」は《準体言》の用法となるので、訳出の際には直後に準体言「の」を補うことになる。

(二) はじめの「胸つぶれて」は、「ハツとして感慨が胸に溢れる」といった意味であり、その感慨の種類自体は文脈ごとに判断しなければならぬ。ここでは、傍線部工にあるとおり、久しぶりに遠くから見たいらしい娘がかわいらしく育っていたことによつて起つた心情だから、肯定的なものであるはずだ。

これに対して、「くちをし」は「残念だ・無念だ・不満だ」などと訳されることが多い、否定的な感情を示す語である。したがって、この二者間のギャップをどう埋めるかが、読解の確かさの現れとなる。

娘の状態について（西行法師から見て）否定的に描写された部分を文中に探すと、7行目の「いとあやしげなる帷姿にて、下衆の子供に交りて、土にをりて」が見える。「帷」はひとえもの、すなわち裏地を付けない着物で、ある程度の身分のある人なら（盛夏の下着は別として）「裕あむせ」が当然だった時代においては、貧しい庶民層のものである。「下衆」は「庶民・召使い」の階層を示す語。西行が俗名を佐藤義清といつてそこその身分のある平家の有力武士だったことは無理に憶えなくてよいだろうが、それにしてもわざわざ「下衆の子供に交りて」と言挙げしていることから、「本来そんなはずはないのに」といった気持ちが暗示されていることには、文脈上気づかなければならない。とすれば「土にをりて」も、本来家の中で姫として育てられて当然の女の子が、直に地面の上で遊んでいるのだから、これも扱いが召使い並であることを言っている。

これらが確認できたところで、西行の「くちをし」という気持ちにどうつながるかが、ここでの問題は、右に見ただけでも親としては不満に思つて当然だろうから、ここで文脈の確認が中断してしまいがちだということである。はじめからこの文章を見てくると、

そもそも西行は出家を決意して愛娘を弟に託すにあたって、「子にしていとほしみすべきよし、ねんごろに言ひ置きける」（3行目）と、弟が愛娘を大切に育ててくれることを期待していた。ところが実際には、娘は養子どころか、使用人の子供同然の扱いしか受けていない。だからこそ、「いと」と強調されて「くちをし」という気持ちが表示されているのだ。解答欄が2行も与えられているのは、このことまで答案に盛り込むことを期待されたものと考えるべきだ。

なお、設問には「どのように感じたのか、またそれはなぜか」とあるが、この順番に「〜と感じた。そしてそれは〜だからである」などと説明すると字数を無駄にする。東大古文の説明問題ではこのように要求が複合的になされることが多いが、前提条件である理由説明を先に書くのが、引き締まった答案作成の基本である。

(三) はじめの「いざなむ」は感動詞「いざ」に係助詞「なむ」がついたもの。大人の世界では「いざ給へ」「いざさせ給へ」などの形で現れることは慣用句の学習上の必須事項で、「さあ、おいでなさい」「さあ、いきましよう」などと他者を誘う言葉である。「聖」は本来は特定の寺院の組織に属さずに孤独かつ真摯に修行を積む出家者を敬って呼ぶ言葉だが、のちには一般に「修行僧・乞食僧」あるいは「旅の坊さん」程度にも使われた。ここでは五歳（古文では数え年だから、現在の満年齢で数えると三〜四歳）の子どもが言うのだから、「お坊さん」程度で十分。「恐ろしきに」の「に」は、ここでは《接続助詞》として機能している。これを《順接確定条件》で解釈すれば、倒置構文で「あっちへ行こう」とまわりの子どもを誘っていることの理由として適切である。

主語については、傍線部の前の節に「この子の」と明示されている。指示語を含む形でなく、文脈上明らかな人間関係から、「（西行の）娘」とすればよい。

問題はその言葉の投げかけられる相手だが、傍線部の前の「わが方を見おこせて」から「自分」すなわち「西行」に語りかけたと考ええると、ひっかかったことになる。「聖」と呼ばれたのが、（たぶん）ぼろぼろの格好をして娘の方をただごとならぬ目つきでじっと見つめている人物、すなわち「西行」なのだから、その人物に「こわいからいっしょにあっちへいこう」と言うのでは筋が通らない。ここで、「下衆の子供に交りて」（7行目）から、娘のまわりには召使いの子どもたちがいることを思い出す必要がある。

娘がまわりの子どもたちと一緒にこの場を去ろうとした理由については、右に見たとおり、「知らない坊主が自分を見つめているから」に他ならない。さきほどの数え年のことを念頭に置きながら西行が出家したときの娘の年齢を逆算すると、娘はそのとき満年齢でせいぜい二歳にしかなっていない。下手をするとやっと一歳になったばかりかもしれないのだ。父の顔など憶えているはずもな

い。実の父が、娘に対する愛情と、自分を裏切った弟への怒りと、さらにそれらを口に出してはならない出家修行者の立場の苦しみが縋い交ぜになって苦しんでいることなど、幼い子には知る由もない。娘からすれば「怪しげな乞食坊主が思い詰めたようなおかしな目つきで自分を見つめている」だけなのだ。なんとも切ない話である。

なお、前問と同じく、設問の指示の順番にとらわれず、一読して意味が明確なすつきりとまとまった構文で答案を作成することを心がけたい。